

# 幼児期における新しい鬼ごっこを通しての運動能力向上に関する 実証的試み

花井 源太 (山口大学)

## 1. 目的

近年様々な要因により、幼児期の基本動作の獲得機会や運動能力が減少している。そこで本研究では、楽しい集団（グループ）での遊びを介した運動能力向上プログラムを開発する一助として、新しい鬼ごっこを実施することにより、年長児における運動能力の向上について検証することを目的とした。

## 2. 研究方法

鬼ごっこの開発に際しては、ソフトボール投げ、反復横跳び、立ち幅跳びの動きに焦点を当て、Step1～Step3の三段階で構成した（図）。Step1では、遠投動作、反復横跳びの動作の獲得をStep2では、投球動作、反復横跳びの動作の獲得をStep3では、投球動作、立ち幅跳びの動作、反復横跳びの動作の獲得を目的とした。また、鬼ごっこ介入による記録の比較検証を行うため、上記3種目の記録測定を介入前後に各1回実施した。

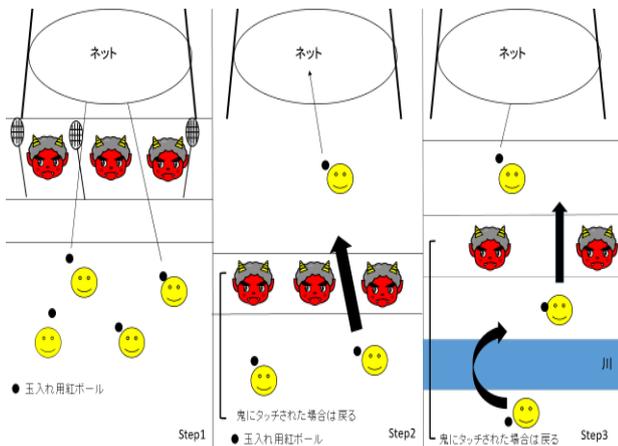


図) 鬼ごっこ各 Step の説明

- 1) 対象者：年長児 5～6 歳（男児 28 名、女児 17 名）
- 2) 調査期間：平成 29 年 10 月 17 日から平成 29 年 11 月 7 日
- 3) 分析方法：対応のある t 検定を用いて鬼ごっこ介入前後の記録の比較検証を行った。

## 3. 結果と考察

園児の記録を比較するにあたり、男女それぞれを平均値以下と平均値以上の 2 グループに別け比較したところ、男児に関しては平均値以上の反復横跳び以外の全ての項目で鬼ごっこ介入により記録が有意に向上した。女児では平均値以下は全ての項目で、平均値以上は反復横跳びのみ記録が有意に向上した。

### 1) 縦断的研究との比較

本研究は 3 週の間で園児の成長を考慮せず行った。そこで、園児の成長を踏まえた 3 年に及ぶ追跡データ<sup>1)</sup>との比較を行った。年中から年長の 1 年間の伸び量は、ソフトボール投げ 3.32m、立ち幅跳び 17.3 cmであったのに対し、本研究での伸び量は、ソフトボール投げ 0.78m、立ち幅跳び 6.91 cmとなり、1 年間の伸び量と比べても園児の運動能力向上に好影響を与えたと考えられる。

### 2) 平均値以下のグループの伸びについて

介入 2 週目以降に感じられたのが介入前の測定で平均値以下の記録を示した園児の動作の変化であった。鬼ごっこの中で日頃あまり行わない動作を頻回にしたことで動作の獲得につながったと考えられる。それに対して平均値以上の園児で大きな変化が見られなかったのは、介入以前から高いレベルで動作を獲得しており、技術介入を行わない鬼ごっこでは記録の向上に限界があったと考えられる。

## 4. 結論

本研究では、当初園児の全体的な運動能力の向上を目的としていたが、平均値以上のグループに比べ平均値以下のグループの伸び量が大きかったことから今回開発した鬼ごっこにはボトムアップの効果が期待できることが示唆された。

## 5. 主な参考文献

- 1) 春日晃章, 幼児期における体力差の縦断的推移：3 年間の追跡データに基づいて、発育発達研究, 41, pp.17-27